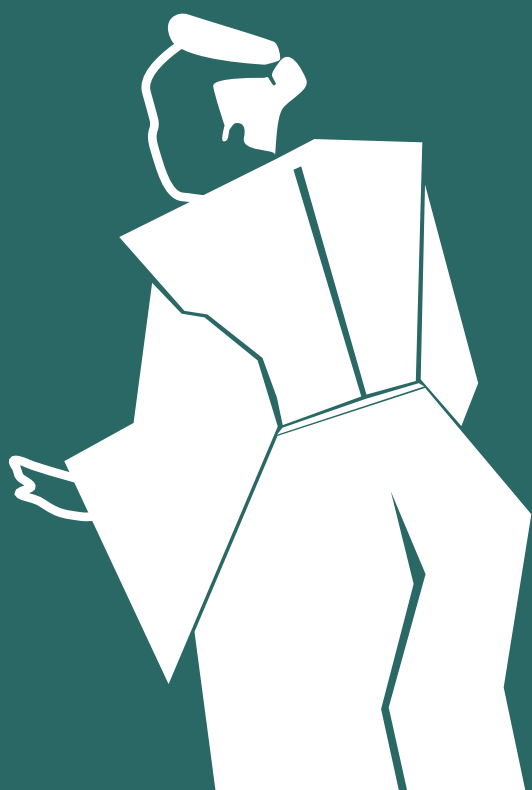


第1回 地域交流会 in伊勢の記録



開催概要

日時：2014年5月17日（土）
13:15～20:00

開催場所：三重県伊勢市

協力：NPO 法人 旧御師・丸岡宗大夫邸保存再生会議
NPO 法人 伊勢河崎まちづくり衆

一般財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団
写真：砺波周平 デザイン・制作：匠工芸

第 1 部

伊勢のまち歩きと

旧御師・丸岡宗大夫邸保存再生会議の活動報告

旧御師・丸岡宗大夫邸をはじめ、御師の歴史文化が色濃く残る山田地区と「伊勢の台所」といわれ参宮者の食料や物資を供給した河崎地区を、両地区で歴史的な建造物の保存・活用の実績を有する「NPO 法人 旧御師・丸岡宗大夫邸保存再生会議」と「NPO 法人 伊勢河崎まちづくり衆（メンバーの多くは両団体に属す）」の両団体に案内していただきました。また、当財団理事で伊勢のまちづくりブック作成にもかかわった梶島邦江さんにもコメントをいただきました。





「伊勢河崎のまちなみ保全型まちづくり ～対立から協働のまちづくりへ～」

NPO法人 伊勢河崎まちづくり衆 理事長 高橋徹さん



河崎のまち

室町時代の後期に勢田川のほとりを環濠と土塁で囲われ、つくられたまち。江戸時代に参宮客でにぎわう宇治・山田に、勢田川の水運を利用して大量の物資を供給する問屋街として発展した。太平洋戦争の空襲を免れたため、古い町並みが残る。

河崎の町並み保存活動の発端は行政との対立

昭和49年の七夕豪雨によって勢田川が氾濫し、河崎の川沿いの町並みは免れたが市街地の大半が浸水した。復興策の一環として、右岸側を立ち退きさせるという勢田川の河川改修計画が建設省（当時）から持ち上がった。川沿いの貴重な町並み景観がなくなることへの危機感を抱いた市民有志が、意義申し立てをしたことが町並み保存運動の始まりである。その後、活動に携わった人たちは、川沿いだけではなく河崎全体でまちなみを保存していかなければならないという思いに至る。

最初の拠点「河崎まちなみ館」

活動が本格化し、観光資源保護財団（現日本ナショナルトラスト）によって緊急の町並み調査が行われ、空き蔵を改造したミニ資料館「河崎まちなみ館」が開館し、まちづくり活動の拠点となった。「伊勢河崎の歴史と文化を育てる会」が管理運営を担うことで活動を継続することができ、まちづくりにおいて活動拠点の存在が重要であることを認識した。

様々な事情で河川改修が通常の改修になり、また、工事の進捗も遅々としていたことから、保存活動も少し停滞期に入った。しかしその間にも立ち退きが行われ、蔵は壊されていった。この危機を打開するため、活動の広がりを目指す「伊勢河崎蔵バンクの会」を立ち上げ、問屋街河崎の特徴である蔵を活かしたまちづくりを進めた。

内 宮

河崎の町並み保存運動の初動期には、内宮門前町（おはらい町）も来客が少なかったことから内宮門前町再開発委員会が立ち上げられ、おはらい町の再開発構想が計画された。こちらは、当初から住民、行政、専門家、企業などの協働により進められた。

前回（平成5年）の遷宮の際に、おはらい町の町並み整備とおかげ横丁ができて、観光客が増加した。経済的によくなってくると、多くの市民からも河崎の歴史的町並みや古い建物の再生活用の重要性が理解され、歴史的町並み、古い建物を残したほうがいいという機運が広まってきた。

伊勢河崎商人館の開館

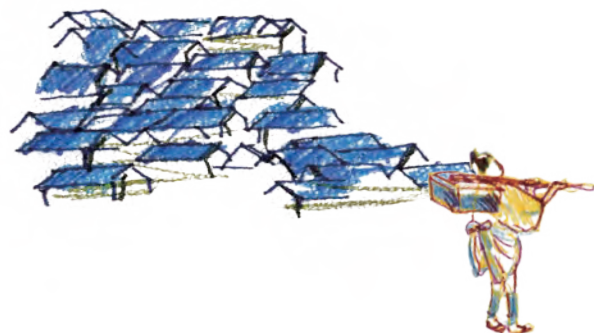
江戸時代創業の酒問屋の敷地にマンションの建設計画が浮上し、まちの真ん中にある老舗の商家の風格ある建物や庭が失われるおそれが生じた。「蔵バンクの会」として建物の保全活用を提案、市と折衝を行った。市は、町並み保存・歴史的建造物の保存のため、持ち主から土地を買い取って建物の寄贈を受けた。その後、市が整備し、「NPO法人 伊勢河崎まちづくり衆」が管理運営を担うこととなった。伊勢河崎まちづくり衆は、この「伊勢河崎商人館」の管理運営を中心に、河崎のまちづくりを推進していく組織として設立された。商人館の開館は、行政との協働のまちづくりのはじまりとなった。現在、商人館は、まちづくりシンポジウムや絵本を楽しむ会、アートスクールをはじめとする各種催しや、月に一度の「伊勢のだいどこ市」が開催されるなど、まちの交流拠点として大きな役割を果たしている。

その他

二見町でも閉館になっていた皇室ゆかりの旅館である賓日館（歴史的建造物で後に重要文化財）が、「二見浦・賓日館の会」と行政の協働により資料館として開館した。

まちづくり活動は運動を継続していくことが大切で、あるときに神が微笑み、活動がジャンプすることができるのである。古い町並みを生かして活性化を図るには、商いの視点がなければ持続できない。河崎は景観条例など町並み保全のための地区指定はされていない。かつて街並み環境整備事業をすすめる中で、一部住民と軋轢を生み挫折したことがあり、現在は、私たちNPOではなく、市が前面に出て重点地区指定に向けた機運を高めている。全体ではなく、「こまちなみ」スタイルの地区指定を目指している。

町並みを保存するには、活用することが一番であるので、空き町家や空き土蔵を、飲食店や工房などへ再生利活用する事業を推進している。



「旧御師・丸岡宗大夫邸保存再生事業について」

NPO法人 旧御師・丸岡宗大夫邸保存再生会議 代表 阿形次基さん



山田のまち

山田のまちは、四つの市（三日市、五日市、六日市、八日市）がたつまちだった。外宮（食の神様）のお膝元であったので市が盛んだった。市から始まってまちができ、鎌倉時代に参宮街道に参宮道者が通り、江戸時代には門前町として最盛期を迎えた。自治都市で、山田を三分する「山田三方」という自治組織があった。三方それぞれに御師がはりつき、街道に小さな道ができて、寺ができて世古になっていった。

御師丸岡宗大夫邸

参宮街道から烏帽子世古を入ったところ（慶長年間に開発された地域）に位置している。烏帽子世古の名前の由来は、近くに神こうどのとよばれた小祠が祭られ神楽衆が出入りしたことによる。長屋門と一部邸宅が健在で、御師の遺構としては、伊勢山田で唯一、母屋と長屋門が残されている貴重な存在。

NPO 法人 旧御師・丸岡宗大夫邸 保存再生会議のミッション

歴史都市伊勢の大切な宝物である旧御師・丸岡宗大夫邸の保全活用を核とした活動を推進することで、地域に誇りと愛着を持って住み続けられるまちづくりを行う。地域の歴史遺産を掘り起こし、生かし、残し、伝え、次世代に引き継ぐ活動によりまちづくり、人づくりを図り、まちの活性化に貢献する。

丸岡邸の保全再生に向けた主な具体的な活動

1. 月に1～2回実施している建物の環境改善 他の助成金も活用して改修を進めている
2. 建物の履歴調査
3. 文献調査
4. 御師文化、丸岡邸の周知を目指した見学会・フォーラムの開催
目下、有形登録文化財として認定を受けることを目指している。

御師料理

御師文化を体感してもらう活動の一環として開催している食談会では、古文書による献立を再現している。古文書は、丸岡家に残されているものや、牧野家文書を活用している。牧野氏は江戸の商人で、牧野家文書は、東京の資料館が所蔵している。文書の中に当主と妻が、お伊勢参りをした際の道中記がある。料理の内容や日付、丸岡邸で神宮に神楽を奉納したことなどの記載があり、丸岡家に残されている記録と合致する。料理の献立の記録はたくさん残っているが（新茶屋でのお出迎え時の提重、昼の弁当、夕飯夜食など）、それは、一生に一度の代参なのに年によって内容に違いがあると、口コミで広がって御師業に差し障りがあることから、丹念に記録されていたと考えられる。

古文書の献立を復元した料理旅館の主人によれば、御師料理は、いまでは貴重な食材が多く、今様の味付けではないので、現時点で、業として扱うのは難しいとのことだ。本日のように、まちを歩いて御師邸を見てもらい御師文化を体感してもらった後であれば意味がある。御師料理は、御神饌が散りばめられた食事で油分を抜いており、懐石に近い。これは、神と共にいただくという考えに基づいている。

御師は旅行業の元祖

トーマス・クック（1808～1892）が旅行業のはしりと言われているが、それよりはるか昔に伊勢講を組織して、代参させ、伊勢信仰を広めた御師が旅行システムを作っている。今後、そのシステムのあり方を研究することに意義があるのではないかと考える。



梶島邦江さん（埼玉大学教授）のコメント



阿形さんや高橋さんたちと市民参加のまちづくりをすすめる「まちづくりブック伊勢（2000年に発刊）」をつくった。この本は、一昨年、日本都市計画学会からまちづくりグッズ賞を受賞した。本をつくるにあたり伊勢にずいぶん通ったが、今日久しぶりにまちを歩いて遷宮の力のすごさを改めて実感した。

私もHC財団から助成を受けたことがあり、今日集まっている皆さんと同じ立場だ。1回目は浦安におけるまちづくりブックをつくる活動で、この本（まちづくりがわかる本—浦安のまちを読む）も無事に刊行され、日本都市計画学会石川奨励賞を受賞した。2回目はそれから2年後にそのブックを使ってまちづくり教育を行うという活動だった。しかし、終盤に自分自身が病気になって不本意なかたちで終わった。

まちづくりの現場で頑張っている皆さんには、健康に留意して息長くまちにかかわっていただきたいと思う。また、財団には、そのようなまちづくりの現場で頑張る人々の隣人として寄り添ってほしい。



神領伊勢(山田)の記憶

時を超える「とおきのお物語」。伊勢人の「昔」に出会うまち歩きのスミ

おんし 御師の歴史文化 追想の道

かつて伊勢は神領として位置付けられて、神宮の権禰宜クラスの神官であり、今でいうエージェントと旅館業を営む「御師」と呼ばれる人々を中心に、明治4年の御師制度廃止まで自治都市として栄えました。彼ら「御師」は全国に檀家を持ち、伊勢講を組織して「伊勢参り」の仕掛け人として活躍しました。

⑥ 丸岡宗大夫邸 長屋門

御師丸岡宗大夫邸

丸岡宗大夫は御師制度が廃止されるまで代々御師を営むとともに町年寄りの一員として山田の自治を担いました。烏帽子世古に残るこの建物は、戦災を免れ、伊勢市に現存する唯一の御師邸であり、慶長年間からこの地に存在する貴重な歴史遺産です。丸岡宗大夫は大坂や信州に八千軒ほどの檀家を持つ中規模程度の御師で、邸内には当時の御師の接待の様子を伺い知ることができる古文書や食器なども残されていました。

筋向橋

筋向橋は、伊勢への街道の合流地点でした。江戸から伊勢への距離は江戸の日本橋からこの伊勢の筋向橋までの距離で算出しました。江戸の日本橋、京の三条大橋とならんで重要な橋だったということになります。現在残っている擬宝珠には、嘉永2年(1849)の銘があります。



御師と芭蕉

芭蕉は伊勢に6度ほど来ていますが、山田の御師との交流は非常に多く、また、多くの俳句を残しています。特に逸話としては元禄2年奥の細道の旅を終え外宮の遷宮を奉拝するため山田の御師 島崎又玄邸に逗留。若い妻のもとに感謝してこんな俳句を詠みました。

「月さびよ
明智が妻の話しせん」

この句の句碑⑦をはじめ、縁のある芭蕉の句碑を見ることが出来ます。

⑦ → 山田芭蕉の句碑

山田羽書

日本最初の兌換紙幣、藩札はこれに習って作られました。(現在の地域通貨) 写真は寛永年間(1624~43)に宇治の梅屋松太夫が発行した一匁札。山田三方が発行を許可し、後には山田奉行が監視するようになりました。(現 宇仁田呉服店あたりに羽書とお金の交換所がありました)



豊宮崎文庫 (国史跡)

慶安元年(1648)出口延佳の首唱、三方家、町年寄りなど同士69名の協力で創立された外宮神官修学の道場。図書館と1種の学校の性格を併せ持っていました。(明治元年廃止)



① 豊川



② 坂社



③ 龍大夫邸跡(現大豊和紙工業)



④ 須原大社



⑤ 東家 神路通り

伊勢信仰を全国に広めた御師

伊勢に行きたい 伊勢路が見たい
せめて一生に 一度でも
わしが国さは お伊勢が遠い
お伊勢恋しや 参りたや

(伊勢音頭より)

伊勢音頭に詠われたようにかつて伊勢はあこがれの地でありました。江戸時代には御師の活躍によって全国津々浦々まで「伊勢講」が組織されました。伊勢講とは、町、村など、ある一定の集団の中で、各自が少しずつお金を出し合い、代表者が伊勢参宮に出掛けるしくみ。伊勢まで行けば、その「講」ごとに決まった御師が迎え、館に泊めて大いにもてなしてくれるので、慣れぬ旅でも安心、というわけです。

まち歩き ～参加者の感想～



特に印象深かったのは、和紙の製紙工場が伊勢にあることの発見でした。



「おかげさんで」という心が伊勢の方々に沁みついていることに改めて感動しました。



熊野と伊勢の違い

熊野神社の御利益を広めた比丘尼は「熊野神社のお札をおまつりすれば参拝したと同じご利益がある」と教え、伊勢神宮の御師は「伊勢神宮へお参りすれば御利益がある」とふれました。日本中に3,000社あると言われるほどの熊野神社があるのはそのためとも言われています。お伊勢さんのほうが商売上手だったんですね。



伝統と歴史のある古き良きものを再生、保存するにはどれだけ熱い気持ちをもった方がいるか、そして立ちどかる規制をいかに乗り越えていくかがポイントだと感じました。「歴史は古くならない」という言葉に心打たれました。



日本においてこれから国際的に観光に力を入れていくうえでも、歴史的建造物を保存再生された経験から障壁となる規制や法律などを変えていくような提言をしていただければと思います。

第 2 部

2014年度の助成対象団体の活動紹介

次ページ以降の活動紹介にかかる9団体のほかに「NPO 法人 旧御師・丸岡宗大夫邸保存再生会議」も2014年度の助成対象団体です。





きよさと移住者ネット（北海道清里町）

活動のテーマ：創ろう!! 移住後の田舎暮らしを支えるネットワーク

■活動地域＜きよさと町＞等について

きよさと町には、大規模な農家が多くて経済的にまちが潤っている。これぞ北海道という風景があり、自然環境は抜群。

農家の嫁、山村留学、定年後の終の棲家、自営業の開業など移住者は多いが、住んでみると見た目と違うことから定着しない。農家の嫁は、限度を超える忙しさと話し相手もないうえに、地元住民と考え方が大きく違うことから10%以上離婚してまちを離れてしまう。まちは盛んに外部からの移住をすすめるが、移住後のフォローが行われていない。

■団体について

移住者同志で支えあうコミュニティをつくることを目的として、農家の嫁が中心になり設立した。活動を通じて支えあい、次に移住してきた人、今住んでいる人がこぼれ落ちないように、心のセーフティネットになることを目的としている。

■今後予定している活動と展望

懇親会の開催、まちのイベントへの出店、お産の後のケアなどの活動を行い、まちに不足している移住者の視点からみたまちづくりの提案を目指す。



報告者 山下健吾さん



NPO法人 えき・まちネットこまつ（山形県川西町）

活動のテーマ：イザベラとひさしの町が蘇るツインタイムトラベル

■活動地域＜川西町＞等について

山形県南部の置賜地方のほぼ中央に位置し、江戸時代から越後、羽州の両街道が交差する交通の要衝。まちにゆかりのある二人の人物がいる。日本奥地紀行に当地を「東洋のアルカディア」を称したイザベラ・バードと、この地が生まれ故郷の井上ひさし（資料館・生家・生まれ育った家・小説に登場する神社が残されている）である。

■団体について

無人駅への危機を打破するために立ち上がった地元高校生と彼らに共鳴した住民により設立された。駅の業務の受託、高校生のチャレンジショップの開店など駅を中心にしたまちづくりに取り組んできた。

■今後予定している活動と展望

古道の復元、イザベラ・バードの鐘の設置、イザベラとひさしのふれあいエリアづくり・まちなか巡りを行い、2人を活かした取り組みを地域活性化や観光資源のシンボルとして住民が共有することを目指す。



報告者 江本一男さん



報告者 高橋美穂さん



NPO法人 FLAG(東京都福生市)

活動のテーマ：福生、米軍ハウスから発信する地域活性プロジェクト

■活動地域＜福生市＞等について

東京の都心から40km、電車で1時間～1時間半のところにあり、市の面積のほぼ1/3を横田基地が占める。アメリカ的な景観があり異国情緒あふれたまちで、日本に返還され安価な米軍ハウスにクリエイターやアーティストが住みついて独特の文化を発信してきた。米軍ハウスには必ず庭がつき、隣人等と良好なコミュニティを育む場所になるが、戦後に建てられた築60年を超えるハウスは壊される傾向にあり、まちの人口も減少傾向にある。

■団体について

米軍ハウスを核としたアメリカの文化に憧れた10名ほどのデザイナーや隣町の酪農家などで設立された。壊される予定だった米軍ハウスを保有し、メンバー自身で改修してグループの活動拠点にしている。これとは別に、米軍ハウスを所有するメンバーが自身のハウスで家開きイベントなども行ってきた。

■今後予定している活動と展望

近隣の酪農家と連携した農業体験、米軍ハウスの拠点で音楽や食を用いたアートイベント、商店街や基地内のボランティアと連携した文化交流イベント、メンバーが施工・建築した新築の米軍ハウスを活用したイベントの開催。地域資源の米軍ハウスを活用して、面白い人たちを呼び込んでまちを盛り上げていくことを目指している。



報告者 左 若林邦雄さん
右 田中克海さん



NPO法人 醸造の町 摂田屋町おっしの会 (新潟県長岡市)

活動のテーマ：豪商の館「機那サフラン酒本舗」の保全の為の地域活性化活動

■活動地域＜摂田屋地区＞等について

新潟のほぼ中央にある長岡市の摂田屋地区は、古くから醸造業が盛んなところで、室町時代や江戸時代創業の酒、味噌、醤油の蔵元がある。その中でも異彩を放つのが「機那サフラン酒本舗」の蔵屋敷。所有者はサフラン酒という薬酒で大成功を収め、一時は養命酒と肩を並べるほどの事業を展開したが、戦後事業が衰退して、庭や屋敷は閉鎖されて、ほとんどの市民が目にしたことがなかった。この建物は 1) デザイン性に満ちていること、2) 今では入手できない素材がふんだんに使われていること、3) 形式ばらない自由な発想で作られていること、が特徴である。

■団体について

新潟県中越地震で地域の蔵造りの建物が大きな被害を蒙ったことから、地域の蔵元が集まって、歴史的建造物や地場産業を活かしながらまちを再建していくことで方向性が一致し、その考えに賛同する地域の有志によって設立された。昨年は建物の調査や創業者をテーマにした講演会のほか、延べ200人のボランティアの手を借り、離れ座敷の内部や庭を整備して一般公開にまでこぎつけた。当日のアンケートから、離れを見た人の97%が残すべきだという結果を得た。

■今後予定している活動と展望

建物の老朽化に伴い、雨漏りや壁に穴があいている箇所が見つかった。最低限の補強工事を施しながら、イベントや一般公開を引き続き行い、市民のネットワークを拡大させて将来の活用の仕方を策定するなど、修復・活用をできるだけはやく達成していきたい。



報告者 平沢政明さん



NPO法人 WACおばま（福井県小浜市）

活動のテーマ：伝統地場産業「アブラギリ」を核とした里山再生プロジェクト

■活動地域＜上根来地区＞等について

福井県は嶺北（越前）と嶺南（若狭）で文化が変わるが、小浜市がある若狭は伊勢志摩や淡路のように古来から朝廷に食材を献上してきた御食国。小浜市の端にある上根来地区は、標高 300m の山の奥で滋賀県との県境にあたる。昔は茅葺き民家が連なり、谷に向かって棚田が広がる風光明媚な山村だったが、現在は限界集落で最近になってゼロ世帯になった（住民票は残されている）。その原因として主産業の衰退（炭焼き・アブラギリ→林業→畜産業）が挙げられる。

■団体について

小浜市ボランティア・市民活動交流センターに集った市内の NPO 法人や任意団体の運営協議会として発足した。まちづくり・子ども健全育成・中間支援を主な活動として多様な主体と連携して活動している。まちなかの活性化などにも関与するなど活動は幅広く、多くの事業の中でも近年は、里山再生に力を入れている。地域の活性化をするとなると、どうしてもイベントをやるとい話になりがちであるが、地域の課題解決のための事業をつくることを目的として、里山再生プロジェクトを立ち上げた。

■今後予定している活動と展望

ないものを憂うのではなく、あるもの探しの中で、空き家、森、アブラギリ、雪を捉えなおし、助成対象活動ではアブラギリにフォーカスを当てた活動を展開している。アブラギリは江戸時代に興った産業だが、石油が入ってきて工業用油としての需要がなくなり、文化的にも技術的にも途切れてしまった。これをもう一度産業として復活させてみようと、地元の高校などと連携して活動を行っているが、油を使った和傘、葉寿司、キノコ栽培など、まずは小遣い稼ぎ程度を稼ぐ事業にしたいと思う。今マイナスとなってしまったものを発想の転換でプラスの価値を生み出したい。



報告者 中島阿児さん



加子母むらづくり協議会（岐阜県中津川市）

活動のテーマ：加子母木匠塾と地域との協働による明治座改修

■活動地域＜加子母地区＞等について

中津川市の最北端に位置し、遷宮の際に御神木を切り出している地域で、伊勢とご縁がある。地区の 94% が山。平成 17 年に中津川市に編入合併される。岐阜県東濃地方は江戸時代より地芝居が盛んで、かつて 60 棟以上の劇場形式の農村舞台があり、現在も地歌舞伎が上演される芝居小屋が最も多く現存する地域である。明治座は明治 27 年に地元の有志によって建設された。毎年、子ども歌舞伎や、クラシックコンサート等が開催されている。築後 120 年を経過して柱の腐食、雨漏り、屋根の波打ちなど、早急に修理の必要がある箇所が出てきた。加子母木匠塾は、平成 7 年に建築を学ぶ大学生が森林や林業と深い関わりのある地域で、木造建築を学ぶセミナーとして始まり、これまでに参加した学生の延べ数は約 3 万人に及ぶ。夏休み期間の 2 週間に、120 ～ 150 人が合宿をして地域の工務店の協力を得ながら、古民家の再生など地域の要望に応えてきた。

■団体について

加子母むらづくり協議会は、平成 23 年に地域の自立を目指して全住民が参加して組織され、地域づくりに取り組んでいる。協議会には、商工業・地域づくり・防災安全・社会福祉・住環境・教育・文化・スポーツ・農業・林業の 10 分科会が設置されている。加子母木匠塾は、大学教員、学生、地元工務店、建築組合、林産組合、行政等で組織する「加子母木匠塾実行委員会」によって運営されており、加子母むらづくり協議会は、地域づくり分科会をはじめ、地域をあげて学生達の取り組みをサポートしている。

■今後予定している活動と展望

平成 26 年度は、加子母木匠塾の開校 20 周年を迎えるにあたり、地域からの要望のある建築物の制作とともに、明治座の改修を地域住民と協働で行う。耐震や現在のセメント瓦を板葺きの屋根に戻すなどを計画している。材料（クリ材）や板へぎ職人の減少を学生とアイディアを出し合いながら補っていく予定。



報告者 伊藤満広さん



かやの木会（三重県熊野市）

活動のテーマ：古民家を拠点とした過疎山村地域と大学の交流による地域創造

■活動地域＜湯谷地区＞等について

三重県熊野地方の奥熊野に位置する。山の中で高齢化率ほぼ100%の地域。南北朝の落人が移り住んだと言われ、南北朝最後の皇子「尊雅王」の終焉の地とされる。また、森林伐採において、入り用な木だけを伐採して森林を守る「なすびぎり」という独特な伐採方法が伝承されてきたところである。この集落の歴代の庄屋であった尾中家は、所有する古民家「茅の木館」に山仕事の道具や山にまつわる資料などを収集・保存し、それらの伝承を地域住民と行ってきた。しかし、当主も80歳を超え、住民の高齢化とともにその活動が衰退し、山の記憶が語り継げない状態になりつつある。

■団体について

20年ほど前に、山村文化の歴史をより多くの人と共有したいという当主の思いから「茅の木館」一帯を「茅の木園」として整備し、市内外の住民に声をかけ組織化した。伝承活動として年に1回「茅の木まつり」を開催し、食文化（トチモチ めはり寿司）や、技術（杉皮剥ぎ 木挽き）を語り継いできた。メンバーの高齢化に伴い、社会調査実習のフィールドとして関わりのあった京都大学、関西学院大学と連携を図り、活動を維持していこうとしている。

■今後予定している活動と展望

伝承すべき山村文化を、データ、画像、映像等で保存。古民家「茅の木館」の保全、活用方策の検討。山村遊学の実施、村都連携ネットワークの構築。地域外の人々の力を借りてコミュニティを維持していきたい。



報告者 松井和子さん



報告者 久保智さん



ダッズ村プロジェクト（京都府城陽市）

活動のテーマ：ダッズ村 父子が創る父子の為の地域子育て支援拠点

■活動地域＜城陽市＞等について

城陽市は京都から五里、奈良からも五里に位置し、古くから「五里五里の里」と呼ばれ、古い歴史を物語る古墳や遺跡、由緒ある社寺仏閣などが数多くある。肥沃な土壌と温暖な気候、豊かな地下水に恵まれる。

井手町、宇治田原町は現在でも綴喜郡という一つのくくりがあるが、実は城陽市青谷も昭和26年までは綴喜郡のひとつの村として存在していた。青谷はその井手町、宇治田原町の間に位置する。それぞれの町にはUターン、Iターンにより、子育て世代が増加してきているが、町のくくりを超えたつながりをつくる為に、それぞれの町の中間に位置する、この青谷地区を選定した。

■団体について

30代～40代のなかばの子育て世代を中心に、父親の子育て参加を促し、子育て支援拠点をつくるために結成した。イクメンといったファッション的なことではなく、父親が、強い父親像を子どもに見せながら、子どもと共に地産地利用の秘密基地づくりを行っている。現代文明に頼らないものづくりの手法で、無形の価値を提供していくことで、親子間、夫婦間、近隣住民間等に健全なつながりが生まれ、それが地域の安全・安心・価値向上につながると考える。また、父親には、子どもと過ごす時間、仕事の時間、遊びの時間のバランス感覚を養う機会を提供している。ものをつくることを目的とせず、プロセスを重視し、子どもも大人も自由に創造実践できる場づくりを行っている。

■今後予定している活動と展望

電気・ガス・水道のない環境を受け入れ、農山村地域の伝統的な家づくりの手法を取り入れた拠点づくりを実施中。大阪工業技術専門学校の技術提供を受けて、4月に建て方と上棟式を行った。父親の積極的な参加が見受けられた。学生と父親がハウスの建て方を行うかたわらで、子どもも縮尺された寸法の資材を用いて家づくりを体験した。今後は、地域の稲、竹、土を用いた土壁塗り、外壁仕上げ、内部床張り等を父子で行う予定。



報告者 荒井圭一郎さん



報告者 脇本尚憲さん



ぐるぐる海友舎プロジェクト実行委員会（広島県江田島市）

活動のテーマ：築百年の洋館“海友舎”の再生からはじまる記憶の継承

■活動地域＜江田島市＞等について

江田島市は四町が合併してできた市で、江田島、能美島とその周辺に点在する島々で構成されている。江田島は瀬戸内海で四番目の大きさの島で、広島港から船で30分ほどのところにある。海軍兵学校があった場所として知られている。

海友舎は、明治40年に海軍兵学校で働く兵士や下士官の娯楽兼福利施設として建てられたもので、戦後民間に払い下げられ会社の事務所等として使用されてきた。外観は洋館であるが、室内には畳や床の間などをしつらえた、和洋折衷の建物。平成24年に空き家となり解体の危機を迎えた。海友舎は、地域に唯一残る海軍兵学校の関連施設（他にも海軍の施設は存在するが、海上自衛隊が使用中）。

■団体について

海友舎を後世に残したいという想いを持った有志が集まり、海友舎を開かれた場所として活用し、地域を盛り立てていくことを目的として設立された。海友舎の再生・利用を通して高齢化の深刻な地域に若者を呼び込み、地域の問題を地域内外の人々の協力を得て解決していくことを目指す。

■今後予定している活動と展望

活動の4つの軸（手入れをする、使う、学ぶ、発信する）のうちの「学ぶ」と「発信する」に焦点をあてて、江田島の歴史についての勉強会や、高齢者からのヒアリングを基に島の暮らしや文化を紹介する資料やフリーペーパー、今昔写真集を作成・制作する。これまで兵学校があることで島の暮らしにどのような影響があったかについて、きちんと語られることがなかった。ので、冊子等にまとめることで地域文化の継承を図っていきたい。



報告者 南川智子さん



選考委員のコメント



鈴木輝陸さん（江戸川大学教授：選考委員長）

- ・今日の報告では、高齢者も若者も自分の居場所と役割をつくること、場の価値を高めること、地域の歴史を大切にすること、が大事であると感じた。また、活動団体の皆さんは、小さな幸せづくりにも貢献していることを実感した。
- ・本日の交流会は、民と民とのネットワークを築く機会になる。相互扶助の精神でネットワークづくりができていけば、新しい社会ができる。これからも余裕をもって、楽しく、あきらめずに、プロセスを大事にして活動を推進していくことを望む。



遠藤幹子さん（Mother Architecture 代表）

- ・SNSや新しい通信技術を用いて、情報を発信し、自らを知ってもらうことで、活動を広めることができると思われる。今は、皆が知恵を容易に入手できる時代である。
- ・画像や動画を使ってアピールすることは有効であり、それによって如何にファンや協力者を増やすかが大事。
- ・今後も、新しいテクノロジーを駆使して、皆さんが知恵を交換しあうことを望む。

懇親会

御師弁当について

伊賀屋半右衛門殿講御神楽献立 甲の五月二十六日夕飯より 献立を伊勢春慶塗の器に再現
割烹大喜 代表取締役 坂田巧さんによる献立内容の説明



丸岡正之さん（丸岡家十八代目）による説明



献立帳が出てきた際にぜひ御師料理を再現したいと思った。大変豪華だったと言い伝えられているが、どんな料理なのかははっきりしていなかった。大喜さんをはじめ、何人かの料理人に再現してもらっているが、鮑や鯛が入るとなかなか営業ベースにならないようだ。献立にはレシピがはっきり書かれていない。材料があってもどのような味付けなのか、いつの時代のものかわからない。名の知れた料理人に聞くと、醤油は万能調味料で、醤油が出てきてから何もかもが醤油になったという。

今回は刺身の調味料に煎り酒を使っているが、醤油が出てくる前の時代の献立かもしれない。煎り酒は繊細な味で、鯛をさらにおいしくしている。御師弁当の再現について大喜さんにとても真剣に取り組んでもらったことを感謝している。

